

手をつなぎ父を病院へつれてゆく

むかし父が

私を映画へつれていったみたい

春町 美月 大阪府

多くの大人は“どこか分からないけど帰りたい”という想いを持つ。それは場所ではなく“守られていた時間”ではないかと私は感じる。作者は父と手をつなぎ病院へ向かう。今は老いた父を“守る”立場に立ちながら。変化の最中は悲しさばかりが先に見えてしまうが、作者は病院へ向かう道すがらに 幼い自身と手をつなぎ映画館へ向かう父二人の姿”をかげろうのように見ている。

トルソーを抱えて歩く

立ち止まる交差点では丁寧に着く

まちりこ 埼玉県

「トルソー」とは、人間の胴体部分のこと。シーンはマネキンの胴体を運んでいるところだろうが、そこに自身の身体を重ねて見ているのではないだろうか。マネキンの四肢のない胴体を抱えることで、作者の身体も両手で抱き抱えられ、両足で支えられているのを感じる。「交差点」で何度も「丁寧に置く」く異様な意志、置いては抱えなおしているうちに、間違えて自身の身体を置いてしまえそう。

ドーナツの穴の向こうで

子どもが泣いている

爆撃された街で。

広田 土 大阪府

ウクライナで次々に失われていく命。同じ時間軸で私たち日本人は整備された道を歩き、たくさんある種類から好みの「ドーナツ」を選び購入し、食べることができる。作者は、今まさに食べようとしたドーナツを通してこの平和に気付く。しかし、平和な日本に現実感を持って「子どもが泣いている爆撃された街」が入り込める隙間は「ドーナツの穴」ほどの大きさしかないのだろう。

満員電車で陽がさすと

みんな

焼かれた埴輪のようだ

氷丸 茨城県

出勤するためには、生活をするためには、満員電車には心を閉ざして乗らないといけない。作者にはそんな姿がぎっしりと敷き詰められた「埴輪」のように見えた。「焼かれた」と強

調することで、人間が命や心を持って存在している。人間らしさ”からよりいっそう遠ざけられている。心を閉ざして生き続けることで、いつしか生命体であることも手放していつてしまうのかもしれない怖さがある。

花粉立ち昇るホルンのふくよかさ

杏いう子 佐賀県

この季節は、ニユース番組にて花粉の胞子が飛び立つ瞬間が流れる。風におおられ、うねりながら飛散していく黄色の胞子の音色を作者は聴いた。しかもそれがホルンを思い浮かべるものであった。風が撫でたようなホルンのゆるやかで大きな曲線や、こもったようにで軽やかな音と花粉の取り合わせは不思議としっくりくる。

落椿残し掃き掃除する人

鈴木 勝也 京都府

掃除はすべてを綺麗にしないといけないなんて誰が決めたのだろう。何が美しいのか、決めるのはいつでも自分である。「落椿」を傷つけないようにじっくりと丹念に掃除をする「人」の姿が浮かぶ。箒の隙間からこぼれた砂が波のようになって椿を取り囲む。しかし、もしこれが仕事であればこの「人」は注意を受ける。“粋”な気遣いは価値観の分母が大きければ大きいほど排除され、“フラット”であることを求められる。落ちているすべてを片付けるのが掃除という価値観に少しだけ抗う。

寂しいのが嫌で本が読めない

寂しいのが嫌で人に会えない

寂しいのが嫌で

いまはじまるの 兵庫県

本を読み終わったあとは、その世界から一人だけ締め出されるのが寂しい。人と会ったあとは、あんなに話していたのに突然笑いかける相手がいなくなってしまう。最後の「寂しいのが嫌で」のあとにそれぞれが思い浮かべるものは何だろう。寂しさは人から言葉を奪ってしまう。言いきさしで終わることで、完成度の高い作品となった。

夜のバッティングセンター

空振る先輩のワイシャツに

汗としがらみが滲む

佐藤潤華 神奈川県

悔しさが「夜のバッティングセンター」から、「空振」りから、「汗」から滲み出る。言葉ではないもので感情を吐き出す「先輩」、そしてその「先輩」を見つめることが作中主体の

感情の発散の仕方なのだ。心に縫い止めるように隅々まで見つめている、二人だけの濃密な時間。もかくほど「先輩」に蓄積していく「しがらみ」が汗とともに滲んでいるのが分かるほど、じっと見つめる。

怒ったり泣いたりしない

黙るだけ

心を持つにも税金がいる

レモンマートル 北海道

感情を表現するのは、自分の身体の輪郭より外に自分を出すことで、すなわち他者の領域に自分を刺し込むことである。そんなことをすれば同じように他者に自分の領域を明け渡す必要があるときも出でくるが、そんなことはしたくない作者。自分を出さないかわり、あなたもこちらに入ってこないで、という訳だ。「税金」という皮肉が効く。そこには愛想笑いであったり処世術なんかも含まれるのだろう。私たちが払う「税金」は高すぎる。

遮光カーテンと網ガラスと空色

空色と網ガラスと遮光カーテン

座るまどろみ

水木貴奈子 神奈川県

風が吹いて遮光カーテンが揺れることで映る視界の変化。風で大きく膨らんだカーテン、風が止んだあとゆっくりともとの位置に戻るカーテン。その場に留まることでしか見えな
い景色はある。とろとろとまどろむ自分のみがある世界を時おりカーテンが撫で、空の色を
沁みこませていく。極彩色ではない、しかし鮮明に刻まれる空の色。